

おわりに

本書は、2021年6月に発行されたJST研究開発戦略センター編『中国の科学技術力について～世界トップレベル研究開発施設』という報告書をベースとし、これに筆者独自の分析と調査を加えたものである。

筆者は、序章でも述べたように中国の科学技術事情を把握すべく長年の努力を重ねてきたが、より納得できる全体像に迫りたいと考え、JSTにおいて中国の現場に焦点を当てた調査を企画した。調査対象として、中国が現時点で世界トップレベルを誇る科学技術上の施設・装置・研究から、12のテーマを取り上げた。調査の方法は、中国の現地の関係者にインタビューを行い、並行して日本にある同様の施設や日本で行われている研究を視察し、中国の調査結果をより客観的に評価分析するというものである。

この調査報告書について、全体で12もの施設・装置等を取り上げていること、過度に専門的な内容に立ち入っていること、全体を見渡した分析が欠如しているとの指摘があった。そこで、報告書で取り上げた中から、中国の科学技術力をよりはっきり示すと考えられる6個のテーマを選び直し、記述内容もできる限り一般の人にわかりやすく書き直すとともに、これらに共通する中国流の科学技術の特徴として筆者が分析したものを記述したのが本書である。

ここで、筆者と中国との縁に触れておきたい。一つ目は、亡くなった父のことである。父林安治は富山県福光町（現南砺市）に生まれ、太平洋戦争末期に旧制高岡高等商業（現在の富山大学経済学部）を卒業し就職したが、ただちに徴兵されて旧満州の牡丹江の近くに陸軍主計少尉として派遣された。派遣当初は戦闘もなく平和であったが、1945年8月9日のソ連軍の侵攻で状況が一変する。すぐに自ら武装解除した父は、現地人に紛れ込んでソ連兵の捜索を免れた。捕まっていればシベリア抑留で、四年から五年は強制労働、病死などで帰国できない者が多数という過酷な状況が待っていたはずである。父は、薪割りなどの仕事をもらうことで中国や朝鮮の人たちに助けられ、旧満州と朝鮮半島を一年かけて南下し、終戦の翌年に郷里福光に無事帰還している。筆者が小さいころ、平和な時代の旧満州での冬の厳しさや生活ぶりをよく聞かされた。

二つ目は、中国との国交回復に尽力した政治家である松村謙三先生である。松村謙三先生といっても、もはや知る人も少なくなっているが、戦前には民政党の代議士として農政関係を中心に活躍し、戦後農林大臣や文部大臣などを務め自由民主党の総裁候補ともなった大物政治家の一人であり、最晩年は中国との国交回復に尽力した。残念ながら、1972年の田中角栄総理による日中国交回復正常化を見ることなく、その前年に亡くなっている。松村先生は筆者の郷里の福光町出身であり、前述の父も熱心な松村信者として選挙のたびに選挙区を駆けずりまわっていた。このため今でも実家には、選挙応援に感謝する旨を記

した松村先生から父に宛てられた書簡が飾られている。



郭沫若旧邸の前で

郭沫若は中国科学院の初代院長、松村謙三先生と親交があった

このような絆があったにもかかわらず、中国への関心は最近までそれほど大きくなかった。学生時代は文化大革命の真っ只中で、収束後も中国への旅行は簡単なものではなかった。その後、「はじめに」で述べた上海市での衝撃的な体験が、中国への眼を開かせてくれた。亡き父や松村先生と中国との関係を思い起こしつつ、遅まきながら筆者も科学技術分野における中国との関係強化への思いをあらたにしている。

本書の刊行に至るまでに多くの方々にご助力いただいた。

とりわけ、JSTの同僚である秦舟氏には、現地調査のアレンジ、通訳としての同行、本書における人材や予算の関連データの収集整理をお願いしており、彼の助力なくして本書はできなかった。秦舟氏をはじめとして、JSTの調査で6つのテーマを担当した豊内順一、植田秀史、辻野照久、寺岡伸章、渡辺泰司、佐藤真輔の各氏、取りまとめやデータ整理などをお願いした岡山純子、チャップマン純子、米山春子の各氏、さらには専門家として快く相談に乗っていただいた黒川知佳、磯崎芳男、堀田平、渡部潤一、牛草健吉、石井哲也、林崎良英、油谷浩幸の各氏に深く感謝する。

また、中央公論新社の藤吉亮平氏、先輩・友人の馬場錬成、石田寛人、間宮馨、上野慶

夫、小林忠造、丸山剛司の各氏にも大変お世話になった。

最後に、本書の作製に際し適切なアドバイスをしてくれた妻玲子、執筆への意欲を高めてくれたあや乃、梨央、鈴乃の三人の孫たちに、お礼を言いたい。

平成 25 年 7 月

林 幸秀